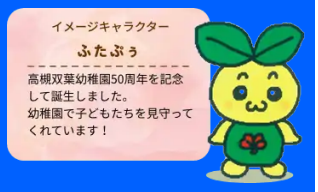
園長通信



2024.09.01

園長　岡部　祐輝

関係性の中で育つ子ども

本日から９月となりました。近年の９月はまだまだ暑い日が続いており、７・８月に引き続き熱中症などのリスクをふまえ、子どもの保育・生活を考えていく必要があると考えています。また同時に２学期のスタート時期でもあります。２学期は学校教育の制度上、一番長い学期であり、その学期の中で日常の保育だけではなく、行事などもいろいろとあることが多い現状です。

行事などの取り組みが続くときに私たち園が特に留意していきたいことは**「行事をすることを目的化しない」**、**「子どもにとってこの経験・過程にはどのような意味があるのか」**ということです。「やり切った！おしまい！」だけで終わると経験がつながったり、活かしたりするということにつながらず終わってしまうことが起こりえます。また、「みんな揃って」、「同じことを絶対にする」などを強要することも、大人の理屈を押し付けることになります。子どもの興味関心、発達の道筋、背景などは１人１人違います。この「１人１人の「違い」があって当然」という考えで保育活動や生活を考えていくこともあわせて必要な要素であると考えます。（後述します）

そしてもう一つの視点として、**「関係性の中で子どもは育つ」**ということです。行事に取り組む際に、早く覚えられるようにしようなど、効率よい指導・支援を考えると、どうしても大人（保育者）の声が大きくなったり話す量が増えたりするものです。**「１人の保育者と１人の子どもが１：１の関係性で過ごす」**ということになり、友達どうしやクラス全体で刺激がある、共有、共鳴し合うというような関係性を経験できないまま、進んでしまうことが考えられます。

(1:1の関係性のイメージ)

私が以前行っていた研究(*1)では、5歳児の子どもたちが、友達との関係性や、状況、相手の思いや考えをふまえて、行動や言葉がけを変化・調整して対応しようとしているということがわかってきました。これらは、「こういう場面ではこう言うのですよ」、「せーの、ありがとう！」というように、大人がフォーマット（形式）を示し、それどおり模倣する練習をするだけでは身につかないものです。

行事を通して、自分の「やりたい」と友達の「やりたい」がうまくずれて互いに願いが叶うこともあれば、同じ「やりたい」がかぶってしまい、調整が必要な状況になるかもしれません。思い通りにいかないときに、どうしていくかという葛藤や戸惑い、時には悲しみなど様々な感情や状況を経験する中で、「保育者と1人の子ども」の関係性だけではなく、「子どもどうし」、「子どもどうしをつなぐ保育者」など多様な関係性が見られることを園として支えていきたいと思います。

「違うこと」はダメなのか？

令和3年度に国の文書で以下のようなものが発出されました。

「我が国の教師は，子供たちの主体的な学びや，学級やグループの中での協働的な学びを展開することによって，自立した個人の育成に尽力してきた。その一方で，我が国の経済発展を支えるために，「**みんなと同じことができる**」「**言われたことを言われたとおりにできる**」**上質で均質な労働者の育成が高度経済成長期までの社会の要請として学校教育に求められてきた**中で，「**正解（知識）の暗記**」**の比重が大きく**なり，「自ら課題を見つけ，それを解決する力」を育成するため，**他者と協働し，自ら考え抜く 学びが十分なされていないのではないか**という指摘もある。」

（中略）

「その一方で，学校では「**みんなで同じことを，同じように**」を過度に要求する面が 見られ，学校生活においても「同調圧力」を感じる子供が増えていったという指摘もある。社会の多様化が進み，画一的・同調主義的な学校文化が顕在化しやすくなった面もあるが，このことが結果としていじめなどの問題や生きづらさをもたらし，非合理的な精神論や努力主義，詰め込み教育等との間で負の循環が生じかねないということや，**保護者や教師も同調圧力の下にあるという指摘もある。**」（＊２）

このように「違うこと」に対して、日本ではまだまだ否定的な文脈で語られることが多くあります。そして「違い」を「同じ」にしていく動きが教育の中にもいろいろな要素として存在しています。

興味関心、発達の道筋、背景などが特に大きく異なっているのが幼児教育です。その前提を無視して、「同じように」、「言われた通りに」することが果たして、一人一人の育ちや幸せにつながっているのかということは考えなくてはなりません。

「違うからこそよかった」、**「違う意見があったからいい企画ができた」**など、違うことを肯定的にとらえる経験を幼少期からできることがそのあとの話し合いや意見表明の各自の姿勢につながっていきます。

しかし、この「違い」をもとに話し合ったり、思いを言い合ったりすることには時間がかかります。そのようなやり取りが2学期は様々にみられると思います。このようなプロセスをぜひ園から発信するお便りやInstagramなどでご覧いただければ幸いです。

（参考文献/引用）

*1：岡部祐輝，中橋美穂，5歳児における遊びや活動の中で見られる自己制御機能の育ち-遊び・活動の状況や仲間関係の観点から考える，大阪教育大学紀要．総合教育科学 71 203-216，2023.

*2：「令和の日本型学校教育」の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申），令和３年，中央教育審議会.